

日本一ドキューンな山

西村 悦子

室堂ターミナルで野沢菜のおやきを頬張り、ミクリガ池の紺碧の湖面を眼下に見下ろしながら、雄山に至る。

雄山からの眺望は三六〇度の大パノラマで、とんがった形は槍ヶ岳、南アルプスの彼方には、小さな小さな富士山まで浮かんでいる。日本海側のこの山から、日本のシンボル・あの愛すべき独立峰のアイコンが見つかるなんて思ってもいなかった。海外で日本車を見かけた時のように嬉しい。山容が特徴的だから、確信をもって「槍だ」「富士山だ」と声に出して呼べるので、なおさら親しみも増す。

そして眼前には劔岳。目指すは魔の山、劔岳。氷河に削り取られた岩峰は、近づく者を確実に拒否している。

「親しみなんて感じてもらわなくて結構。お遊びはここまでだ」と威圧する。

遭難救助のへりが飛び立っていく。ここは富山県警山岳警備隊の前線基地、劔沢キャンプ場。ホバリングの音がガスの谷間に響き続けている。

岩の塊を積み上げてそそり立つ絶壁の前に立つと、自分がいっばしの岳人になったようでドーパミンが湧いて出る。

見た目通りの怖さの、垂直に切り立った岩壁をよじ登り、見た目以上の怖さの、半歩足を踏み外せば谷底に吸い込まれる断崖を、ゾクッ、ゾクッとつま先を岩にかけ、岩にへばりつきしながらトラバースする。上りも下りも一瞬も気の抜けない闘いが、五時間以上も続く。これこそが劔の真骨頂。

「挑戦してよかった」

二十年のブランクがあつて、中年になって再開した本格登山。登り残している山は山ほどある。その中には、もう体力的に遅いかも、と思う山も。ずっと憧れていた劔岳も、諦めるしかない山に分類される場所だった。

「間に合った」

キャンプ場に戻つて劔岳を見上げると、モノクロの岩峰が見下ろしていた。登る前は凄味のある山肌でそそり立っていたが、今は優しげな表情をして見下ろしている。劔に認めてもらえたような気がした。

が、難関はこれで終わりではなかった。このあと麓の櫛平駅まで、気の抜けない難所が次から次と続くのだった。

日毎に代わる雪渓の危険個所を確認するために、真砂沢ロッジに立ち寄る。クレバスの発達『クレバスッ！』聞いたことある、怖いやつ』踏み抜きレクチャ―『踏み抜きッ！』聞いたことないけど想像できる』「雪渓はいったん滑るとどこまでも止まらないから注意するように」と雪原へ送り出された。『止まらないッ！』日本語としてはわかる』

そして最終日には、『黒部では怪我をしない。落ちると死ぬだけ』と風の噂に聞く水平歩道が待っていた。人ひとり通れる幅で断崖絶壁をコの字に削った崖道は、足もすくむ高度の空中回廊。通るだけで足がすくむのに、削りに削った十三kmを、ひたすら足元集中で櫛平に至る。

麓の駅までの道のりはスリリングで、予期せぬ危険がいっぱいで、だけど危険な香りがするからこそ惹かれてしまうー、みたい。ちよつと不良の彼氏が素っ気ないふりして、危険な夜道を駅まで送ってくれたー、ドキュンみたい。みたいな？

孤高のヒーローと、ヤンチャな送り道があつて、劔岳は日本一ドキュンな山

になった。

こうして五泊六日の山旅が終了した。

トロッコ電車で宇奈月温泉へ向かい、共同湯につかりながら、野趣にとんでいた山の湯を想う。山道に忽然と現れた仙人湯では、いつ登山者がそばを通るか怯えつつ湯に浸かり、阿曾原キャンプ場の熱湯露天では、谷水で湯温を調節する軽作業付き。仙人池ヒュッテでは、檜風呂に体を沈めて、トタン屋根に落ちる雨音を泣きたい気分で聴いた。感傷に浸って泣きたいのではなく、仙人池に映る裏剣を楽しみにしていたので、いつまでもいつまでも降りやまない雨音を恨めしく聴いていた。

夫は、仙人の母ちゃん静代さんと、「雨もまたよし」と談笑している。私は、『山に雨は付きもの、雨もまたよし』と念仏のように言い聞かせながら眠りにつく。しかし煩惱は、『雨よ止め』と呪文のように唱え続けるのだった。

目覚めたら、雨は止んでいた。わずかな晴れ間に映りこんだ仙人池の裏剣を見つめていると、こんなサプライズをしてくれる大自然に対して、煩惱にまみれた我が身をシミジミと恥じた。

さて、里のひなびた共同浴場で山の疲れも癒えたし、さあビールだ、ビール、湯上りビール。駆け出そうとしたその瞬間、なにか頭にヨギルもののが。北海道での苦い経験のフラッシュバックが背中を引っ張る。

ちようど一年前、北海道旅の途中でスツカラカンになってしまい、息子にお金を送ってもらったことがある。今回は慎重に、

「とりあえず大阪までのチケットは確保しておこう」

当時、山あいの小さな駅は、現金でしか切符が買えなかった。

ゾツとした。切符を買うと、残りは小銭だけになった。どんなに手の平を広げ

でも、全財産はこれだけだった。観光客で賑わう切符売り場の前、手の平に乗せた小銭をじっと見つめる中年夫婦。

二人の頭上から、黄金色のビアジョッキがグワーンと消え失せる。

『あくくあの日、雨で沈殿中の昼ビール、ひたすら山小屋の売店を往復したっけ。標高二四〇〇mのビールは当然高く、せめて二缶控えていたらしく』

『あくくあの日、バテて甘えた山小屋泊、こんな事になるんだったら、ひと頑張りしてテント設営しとけばよかった』と幽霊文字が次々と浮かび上がる。

イヤ待てよ、今回はアレがある。

前回の北海道旅では、大学に六年も通っている行き当たりばったり人生の息子から、「計画性がなさすぎる」と説教されて、コイツにはもう頼らないゾと、今回クレジットカードだけは握ってきたもんね。

さてさてクレカの出番ですよ、と今度こそ駆け出す宇奈月温泉商店街。

がしかし、どこの店もクレカが使えない。ならばと登山靴でホテルニューオータニに乗り込むが、「わたくし共でビールをお飲み頂けるのはレストランだけで、あいにく今は営業時間外でございます」と。支配人の顔をまわれ右し、速攻大阪へ向かう。

梅田バスターミナルの片隅に、ヒヨロツと赤い鳥居があつて、そのそばに二軒長屋の焼き鳥屋があった。予約している福岡行き夜行バスまで一時間を残すのみとなっていた。ガラリ戸を開けるのももどかしく、顔だけ突っ込みながら、

「カード使えますか」

返事NOに備えて、下半身は隣りの店へと向いている。

「どうぞ」女性の穏やかな声が返ってきた。

八時間お預けのままの湯上りビールのすすむこと、すすむこと。

こうして時間もお金もすべて使い果たした。きれいさっぱり根こそぎ使い切った。剣を味わい尽くした気がした。

ただし、登山にはゆとりを持った日程と予算で出掛けましょう。じゃないと、アイツからまた説教されることになるかもしれないよー。